

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【与野南中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	全国学力・学習状況調査とさいたま市学習状況調査の結果から、全体として基礎的・基本的な「思考・判断・表現力」の定着が図れた。本年度の学力向上策で実施した、TDLや、話し合い活動、タブレット端末の活用などが、効果的な活動であったと考えられる。一方、知識・技能の定着を図るため、ただ丸暗記するだけでなく、生活の中や身近な事象と結びつけながら知識を活用する場面を設定したり、話し合い活動の中で、目的や文脈などに即した活動を行うこと、問題練習を積み重ねることが重要である。次年度は、本年の活動を継続しつつ、知識・技能の定着に向けて、繰り返しの問題練習とともに、丸暗記にならないような工夫を凝らした授業の展開を検討し、実践する。
思考・判断・表現	全国学力・学習状況調査とさいたま市学習状況調査の結果から、全体として基礎的・基本的な「思考・判断・表現力」の定着が図れた。本年度の学力向上策で実施した、TDLや、話し合い活動、タブレット端末の活用などが、効果的な活動であったと考えられる。一方、記述式の問題や、グラフ、図形の問題などで課題が見られた。知識をより深める思考・判断・表現の観点において、思考を深める話し合い活動の充実や、自分の考えをまとめ、発表するなどの共同的な活動を取り入れ、知識を活用するスキルを身につけさせることが重要である。このような活動や課題を設定する授業を検討し、次年度実践する。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p>&lt;学習上の課題&gt; 根拠を基に説明する問いや漢字や単語などを理解する力が不足している。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 生徒が何につまづき、何を得意にしているのかを各教科の特性に応じながら把握することが不十分である。</p>	⇒ ①教科と単元の特性に応じてTDL(Time to Deepen your Learning:学びを深める時間)型授業を取り入れ、学びの過程や理解したことを把握し、繰り返す機会を設け、自己評価を積み重ねながらステップアップを実感できるような授業改善を進める。【1年間を通して実施】 ②話し合い活動やタブレット端末上での意見共有ツールを活用した協働的な学びの機会を設定し、「学び方を学ぶ」指導を継続的に行うことで、生徒の学びの自主を図る。【2各単元で1回以上実施】
思考・判断・表現	<p>&lt;学習上の課題&gt; 国語では「書くこと」、数学では「記述」の問題に対して課題があり、多角的に思考し選択・判断する力が不足している。</p> <p>&lt;指導上の課題&gt; 単元全体を見通した上で、つまづきやすい分野(問題)について、生徒の理解や実態に合わせて柔軟に指導・サポートできる工夫が不十分である。</p>	⇒ ①生徒が多様な思考に触れるため、TDL(Time to Deepen your Learning:学びを深める時間)型授業における生徒同士の協働的な学びの機会を積極的に設定する。 ②各教科の授業にて、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業」を実施し、自分の考えを書く時間、他者の意見と自分の意見を共有、比較し検討する時間などを設定し、生徒が文章を使って表現する活動に重点的に取り組んでいく。【1・2年間を通して実施】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	中間報告に引き続き、TDL型を各教科の適切な単元で実施することができた。また、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業においても実施することができた。生徒は自身の学びを自主させ、主体的に自身の課題と向き合い、学習を進めることで、強化に対する知識・技能を深めることができた。また、自分ではわからない点などは、教員や仲間と質問したり、粘り強く取り組むことで理解・解決することができた。TDL型授業が生徒に定着する一方、周りよりペースが遅かったり、教科に関係ない話で盛り上がりすぎなどの課題が上がったため、教員の指示・指導に工夫が必要であることが分かった。
思考・判断・表現	A	中間報告に引き続き、TDL型を各教科、適切な単元で実施することができた。また、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業においても実施することができた。生徒対象のアンケートにおいてもTDL型授業において、思考力・表現力が身についた実感を持つ生徒が増加した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	令和7年度全国学力・学習状況調査の知識・技能において、全国(公立)の平均正答率と自校の平均正答率を比較し、ほとんどの問題で全国・埼玉県平均を上回ることができた。国語・数学では、すべての問題で平均正答率を超えており、特に数学では全国・埼玉県平均を大きく上回る問題が多かった。数学はほとんどの時間でTDL型の授業を実施しており、その中でも生徒たちが主体的に学んで知識や技能の定着ができていた。TDL型の授業を適切に実施することで、生徒が自身の課題を振り返り、知識・技能の定着を図ることができたと考えられる。一方理科では、化学分野の元素記号を答える問題が全国・埼玉県平均を下回る結果となった。基礎的な問題なので、基礎的な知識の定着を図るための改善が課題である。
思考・判断・表現	令和7年度全国学力・学習状況調査の思考・判断・表現において、全国(公立)の平均正答率と自校の平均正答率を比較し、ほとんどの問題で全国・埼玉県平均を上回ることができた。国語・数学では、すべての問題で平均正答率を超えており、特に数学では全国・埼玉県平均を大きく上回る問題が多かった。一方、各教科で平均正答率が低い問題に目を向けると、記述式の問題で平均正答率が低くなっている傾向が見られた。今後の授業では、自分の考えをまとめたり、知識や技能を要約したりする場面や、授業でとり入れることが必要になると考えられる。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	全ての学年及び教科で市平均を上回る結果となった。知識・技能では、2年生の国語において、①助動詞のはたらきについて理解する問題、②文語の決まりを理解しているかを問う問題、③文脈に即して漢字を使うことができるかを問う問題、において、市平均を下回った。①について、助動詞は「形が似ている」「意味が抽象的」ため、丸暗記で終わりがやすく、文脈と結びつけにくいので、ただ覚えるのではなく自分で使い分ける「練習を増やしたり、生徒が「どんな目的で助動詞を使うか」を考えさせたりする時間を確保する。②について、文語の決まりを身につけるために、「文語→口語の翻訳活動」を軸にし、読解にどうつながるかを実験させる課題を設定する。③について、「意味は知っているが、文脈に合う使い方」になると誤用が起る。「近い意味の語を文脈で選ばせる」問題を増やしたり、書き換えを行う活動を多く取り入れる。
思考・判断・表現	全ての学年及び教科で市平均を上回る結果となった。思考・判断・表現では、2年生の数学において、①グラフの問題、②投影図から考えられる立体の問題で、課題が見られた。①について、「数値の操作」と「意味の理解」がつながっていないため、座標から情報を取り出す経験が不足していることが考えられる。授業では、同じ形のグラフでも「高さの違い」「距離の違い」「残量の違い」などで解釈が変わることを体験させ、話し合い活動などで言語化させることが重要である。②について、平面図形→立体図形への「空間イメージ化」が弱いことや、「どこから見た図か」が曖昧であることが考えられる。授業では、「見える部分、見えない部分」を色分けする活動や、投影図の中でブロック(立方体等)を使って様々な角度から観察することや、回転・投影のアニメーションを活用して、理解を深めることが重要である。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	TDL型を各教科、適切な単元で実施することができた。また、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業においても実施することができた。これにより、生徒は見直しを立てながら、学習のペースを組み立てたり、自分の課題を解決するために必要な学習ツールを選択したり、わからない場面では教員やわかる生徒に質問したりして、知識・技能の定着を図ることができた。	変更なし。
思考・判断・表現	B	TDL型を各教科、適切な単元で実施することができた。また、「さいたま市『アクティブ・ラーニング』型授業においても実施することができた。これにより、生徒は主体的かつ協働的に学習を進め、各教科における思考・判断・表現する力を身につけることができた。	変更なし。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)